慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

| | |
|---|---|
| Title | 17世紀ニュー・イングランド史 : 一つの研究史的考察 |
| Sub Title | History of the seventeenth-century New England : a historiography |
| Author | 大井, 幸子 |
| Publisher | 慶應義塾経済学会 |
| Publication year | 1984 |
| Jtitle | 三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.77, No.3 (1984. 8) ,p.444(128)- 457(141) |
| JaLC DOI | 10.14991/001.19840801-0128 |
| Abstract | |
| Notes | 研究ノート |
| Genre | Journal Article |
| URL | https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19840801-0128 |

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

研究ノート

# 17世紀ニュー・イングランド史

## ——一つの研究史的考察——

大井幸子

はじめに
〔1〕 精神史
（A） エートス論
（B） ケース・スタディ
（C） 思想家研究
（D） 教会史
〔2〕 移民史研究
〔3〕 民主主義の検出
〔4〕 まとめ——ミクロの世界とマクロの世界——
（A） Community Studies
（B） 新しい視点
①経済成長論と世界経済論
②人口統計学と歴史人口学
③家族史・社会史
結び

### はじめに

本稿は，17世紀ピューリタンの入植したニュー・イングランドを対象とする secondary works に関する研究史である。日本でのアメリカ植民地史研究の紹介は，中村勝己〔1974〕[1]，田村光三〔1977〕[2] 以後久しくおこなわれていない。本稿は，特に最近の研究動向に力点を置き，いくつかの分野での研究成果を批判的に概観し，別稿の序説をなすものである。

19世紀末以来今日にいたるまでニュー・イングランドの歴史的研究において近代社会の精神的・物質的基盤をなす諸契機をさぐろうとする研究がいくつか見られた。ニュー・イングランド史研究には，あきらかに近代の原点を探る意味があったことはまず指摘しておかなければならない。

第二次大戦後のアメリカにおいて，植民地史研究は，特に1960年以降さかんになった。その理由として，第1に，建国200年を機に多くのすぐれた史料が編纂・刊行されたこと，第2に，この時期に歴史学が社会科学の他の隣接分野から方法論上の影響を受けたこと等があげられる。若い野心的な歴史家たちは，これまで固定的なイメージでとらえられてきたピューリタン社会を再考しようとし，また史料の密度の高いニュー・イングランドをとりあげ，新しい研究方法を用いてこの社会を分析しようとしているといってよいであろう。

以下，ここ20年間のピューリタン植民地史研究について述べよう。が，その前に古典的研究を概括しておくことにする。

植民地史研究は，前世紀末から始まった。ドイツ歴史学の強い影響のもとに，Adams〔1882〕[3]〔1883〕[4]〔1883〕[5] や Andrews〔1889〕[6] は，ニュー・イングランドタウン

注（1） 中村勝己「英米経済史学会の動向」（『三田学会雑誌』第67巻2・3号，1974，pp. 45—51.）
（2） 田村光三「ニュー・イングランド社会経済史研究の新視角」（明治大学『政経論叢』第45巻4・5号，1977，pp. 425—455.）
（3） Adams, H. B., *Germanic Origin of New England Town*, (*Johns Hopkins University, Studies in Historical and Political Science*, Vol. I, No. 2, 1882).
（4） ————, *Norman Constable in America* (Ibid., Vol. I, No. 8, 1883).
（5） ————, *Village Communities of Cape Anne and Salem*, (Ibid., Vol. I, Nos. 9—10, 1883).
（6） Andrews, C. M., *River Towns of Connecticut: A Study of Wethersfield, Hartford and Windsor*, (Ibid., 7 th Series, VII-IX, 1889).

の起源をゲルマンの共同体に求めた。また，Doyle〔1887〕[7]と MacLear〔1908〕[8]は，ニュー・イングランド社会の全体像を描いたすぐれた研究を残した。植民地史の古典として，Osgood〔1904/07〕[9]，Andrews〔1934〕[10]は，今日でも引照される価値をもっている。さらに，タウン特有の土地制度——タウン・システム——については，Egleston〔1886〕[11]，Akagi〔1924〕[12]，Woodard〔1936〕[13]が，今なおこえる土地制度史の研究があらわれていないという意味で，古典的価値をもっている。

1950年代までに，Miller, Morison, Morgan は，ニュー・イングランド研究を精神史の分野で進展させた。特に Miller〔1933〕[14]〔1939〕[15]〔1953〕[16]が，とりわけ教理上の正統性をめぐる歴史的考察を中心に据え，思想的指導者層に光をあててピューリタン社会を描き出した。

1960年代の一連の研究は，Miller に対する批判から出発した。Morgan〔1961〕[17]は，これからのタウン研究は，各地域・各タウン・各教会ごとにおこなわれ，各々の社会についての史料——town records, proprietors' records, tax lists,——および教会史料——誕生・結婚・死・洗礼のほか，admissions to communion, church discipline——を用い，細部にわたって地域研究をふまえねばならない，と述べている。

実際，1963年の Miller の死以後，地域的個別研究が進むにつれ，ニュー・イングランド社会の多様性が明らかになり，Miller による一枚岩的なイメージは，次第にぬりかえられていった。

McGiffert〔1970〕[18]は，1960年代の研究を総括して，Miller によるピューリタン社会のイメージ——'a thinking community', 'an ideal laboratory'——は，次のような疑問点を残していると述べた。「1. 精神的指導者層が書き残した史料と，彼らが実際に社会の中で実行したこととの間にはギャップがあったのではないだろうか。2. 史料を残すことのない，'common people' はいったいどのように考え，生活していたのか。3. ピューリタンの理念・思想は，社会・経済的要因とどのような緊張関係を保ってきたか。4. 教会と世俗政治とはどのような関係にあったか。5. 人口の増加と土地所有の関連はどうか。」

この McGiffert の指摘は，1970年代の研究動向の指針となった。60年代半ばから若い研究者たちによって，これらの問題点をめぐる新しい成果が次々と発表され，質・量ともに盛り上がりをみせている。こうした状況を McGiffert〔1970〕[18]は「新機軸」，「パラダイムの転換」と称した。それはどのようなものであったかもう少し具体的に述べてみよう。

---

注 (7) Doyle, J. A., *The English in America: The Puritan Colonies*, Part I, 2 vols., 1887 repr. N. Y. 1969.

(8) MacLear, A. B., *Early New England Towns: A Comparative Studies of Their Development*, (*Columbia University, Studies in History, Economics, and Public Law*, Vol. XXIX, No. 1. N. Y. 1908 repr. N. Y. 1967).

(9) Osgood, H. L., *American Colonies in the Ssventeenth Century*, 3 vols., 1904, repr. ed. Peter Smith 1957.

(10) Andrews, C. M., *The Colonial Period of American History*, 4 vols., Yale U. P., 1934.

(11) Egleston, E., *The Land System of the New England Colonies*, (*Johns Hopkins University, Studies in Historical and Political Science*, Vol. IV, Nos. 11—12, 1886).

(12) Akagi, R. H., *Town Proprietors of the New England Colonies: A Study of Thier Development, Organization, Activities and Controversies*, 1620—1770, 1924, repr. ed. Peter Smith 1963.

(13) Woodard, F. M., *The Town Proprietors in Vermont: The New England Proprietorship in Decline*, N. Y. 1936.

(14) Miller, Perry, *Orthodoxy in Massachusetts, 1630—1650*, Harvard U. P. 1933.

(15) ————, *The New England Mind: The Seventeenth Century*, Harvard U. P. 1939.

(16) ————, *The New England Mind: From Colony to Providence*, Harvard U. P. 1953. なお，P. Miller 人と業績については，以下参照。
Heimert, Alan, "Perry Miller: an appreciation", *Harvard Review*, Vol. 2, 1964, pp. 30—48, Morgan, E. S., "Perry Miller and the Historians", *Harvard Review*, Vol. 1. 2, 1964, pp. 52—59.

(17) Morgan, E. S., "Notes and Documents: New England Puritanism: Another Approach", *William and Mary Quarterly* (以下 *WMQ* と略す) 3 rd. ser., Vol. 18, No. 2, 1962, pp. 236—242.

(18) McGiffert, M., "American Puritan Studies in 1960' s", *WMQ*, 3 rd. ser., Vol. 27, No. 1, 1970, pp. 36—67. 1960年代半ばから1970年代は，アメリカ自体がベトナム戦争に介入し，政治的に大きく揺れ動いた時期であった。ニュー・イングランド研究において，こうした政治的な影響はアメリカ社会の原点を見直そうとする運動へ結びついたのである。

## 〔1〕精神史

Miller によるピューリタン社会のイメージを神学レベルから社会的な人間関係のレベルにまで広げて発展させたのは，その弟子 Morgan である。Morgan〔1942〕[19]では，ピューリタニズムの信仰と愛が私的な人間関係の中でどのように実践されたかが述べられ，また，Morgan〔1944〕[20]では，家庭における夫婦・親子・主人と奉公人との関係が描かれた。こうした業績は，今日の家族史・社会史研究に古典的地位を占めるものである。

また，彼はピューリタニズムの理念を別の角度からとらえ直した。Morgan〔1958〕[21]では，植民地最大の思想的・政治的指導者 John Winthrop を中心に，正統派ピューリタニズムが Roger Williams や Anne Hutchinson を異端として排除してゆく過程が描かれている。さらに，Morgan〔1963〕[22]では，英国を脱出し，いったんオランダへ渡った後新大陸へたどりついた Separatists の 'pure church' の理念がどのように実践され，また変容していったかが述べられている。こうした彼の裾野の広い研究は，以下述べるような個別研究によって継承された。

### （A） エートス論

M. Weber, R. H. Tawney におけるプロテスタンティズムのエートス論をふまえて，Morgan をさらに発展させたのは，Foster である。[23]彼はその博士論文〔1966〕で，ピューリタニズムにおける「秩序 order」=「神への服従 subordination」と「愛 love」=「個人の自発性 voluntarism」という二重性を軸に，宗教と政治・経済の関連を検討している。その後の彼の活躍はめざましく，博士論文を改訂した Foster〔1971〕[24]〔1976〕[25]を発表した後，第一級の研究〔1977〕[26]〔1981〕[27]を書き，さらに，Breen と共同で，移民の実証研究をも手がけた〔1973〕[28]〔1973〕[29]。

### （B） ケース・スタディ

Morgan が思想史の領域で扱った個々のケースは個別的に深くより詳しく論じられるようになった。

Morgan〔1937〕[30]につづくハチンソン夫人とアンチノミアンに関する研究としては，Hall〔1958〕[31]，Rosenmeier〔1970〕[32]，Koehler〔1974〕[33]，Maclear〔1981〕[34]。R. Williams については，Morgan〔1967〕[36]以前に Parkes

---

注 (19) Morgan, E. S., "The Puritan and Sex", *New England Quarterly*（以下 *NEQ* と略す），Vol. 15, 1942, pp 591—607.

(20) ————, *The Puritan Family: Religion and Domestic Relations in Seventeenth-century New England*, Boston, 1944.

(21) ————, *The Puritan Dilemma: The Story of John Winthrop*, Boston, 1958.

(22) ————, *Visible Saints: The History of a Puritan Ideas*, Cornell U. P., 1963.

(23) Foster, S., "The Puritan Social Ethic: Calss and Calling in the First Hundred Years of Settlement in New England, (unpublished Ph. D. diss., Yale University, 1966).

(24) Foster, S., *Their Solitary Way: The Puritan Social Ethic in the First Century of Settlement in New England*, Yale U. P., 1971.

(25) ————, "The Massachusetts Franchise in the Seventeenth Century", *WMQ*, 3rd. ser., Vol. 24, No. 4, 1976, pp. 613—623.

(26) ————, "The Faith of a Separatist Layman: The Authorship, Context, and Significance of the Cry of a Stone", *WMQ*, Vol. 34, No. 3, 1977, pp. 375—403.

(27) ————, "New England and the Challenge of Heresy, 1630—1660: The Puritan Crisis in Transatlantic Perspective", *WMQ*, 3rd. ser., Vol. 38, No. 4, 1981, pp. 624—660.

(28) Foster,. S. and Breen, T. H., "Moving to the New World: The Character of Early Massachusetts Immigration", *WMQ*, Vol. 30, No. 2, 1973, pp. 189—222.

(29) ————, "The Puritan Greatest Achievement: A Study of Social Cohesion in Seventeenth-century Massachuserts", *The Journal of American History*（以下 *JAH* と略す），Vol. 60, No. 1, 1973, pp. 5—22.

(30) Morgan, E. S., "The Case against Anne Hutchinson", *NEQ*, Vol. 10, 1973, pp. 635—649.

(31) Hall, D. D., ed., *The Antinomian Controversy, 1636—1638: A Documentary History*, Wesleyan U. P., 1968.

〔1931〕[36]がある。

かの有名な Robert Keayne 事件については，ケインの遺書を分析した Bailyn〔1950〕[37]の研究がある。（その後 Bailyn〔1955〕[38]は，植民地のピューリタン商人の社会を描いた。）また，1660年以降植民地を神学上混乱におとし入れた「半途契約 Half-Way Covenant」論争については，Miller〔1933〕[39]の古典的研究以後，Pope〔1969〕[40]，Beales〔1974〕[41]が，具体的な事例研究としてあげられる。

### （C） 思想家研究

個々の思想的指導者の手紙など自筆の私的な史料が編纂・刊行されるにつれ，その全体像を把握しようとするいくつかの研究が現われた。

J. Winthrop に関しては，Johnson〔1930〕[42]，Gray〔1930〕[43]が古典的だが，その後 Morgan〔1958〕[21]，ウィンスロップ家4代の系譜と植民地の思想的変遷を関連づけた Dunn〔1962〕[44]があらわれた。John Cotton については，Parkes〔1931〕[36]が R. Williams との比較において，正統派ピューリタンとしての Cotton を描き，最近では，Ziff〔1962〕[45]〔1968〕[46]の新しい研究がある。また，Cotton と並ぶニュー・イングランドの代表的牧師 Thomas Hooker については，Bush〔1981〕[47]がある。彼は Hooker の英国への思想的影響をも考慮に入れ，ニュー・イングランドとイングランドとが大西洋を隔てて連続した精神的基盤に立っていることを Hooker の思想の中に認めている。このように両国を思想的な共同体とみなした論文としては Thistlethwait〔1954〕[48]がある。この種の研究には，ほかに英国の思想家 William Ames に関する Sprunger〔1960〕[49]がある。

### （D） 教会史

従来教会史は，教理史との結びつきが強かった（Trinternd〔1951〕[50]，Knappen〔1939〕[51]）。ところが，Lockridge〔1967〕[52]は，タウン研究を教会史へと接近

注 (32) Rosenmeier, J., "New England's Perfection: The Image of Adam and the Image of Christ in the Antinomian Crisis, 1634 to 1638", *WMQ*, 3rd. ser., Vol. 27, No. 3, 1970, pp. 435—459.

(33) Koehler, L., "The Case of the American Jezebels: Anne Hutchinson and Female Agitation during the Years of Antinomian Turmoil, 1636—1640", *WMQ*, 3rd. sed., Vol. 31, No. 1, 1974, pp. 55—78.

(34) Maclear, J. F., "Anne Hutchinson and nhe Mortalist Heresy", *NEQ*, Vol. 54, 1981, pp. 74—103.

(35) Morgan, E. S., *Roger Williams: The Church and the State*, N. Y., 1967.

(36) Parkes, H. B., "John Cotton and Roger Williams Debate Torelation, 1644—1652", *NEQ*, Vol. 4, 1931, pp. 735—756.

(37) Bailyn, B., "The Apologia of Robert Keayne", *WMQ*, 3rd. ser., Vol. 7, No. 4, 1950, pp. 568—587.

(38) ————, *The New England Merchants in the Seventeenth Century*, Harvard U. P., 1955.

(39) Miller, P., "The Half-Way Covenant", *NEQ*, Vol. 6, 1933, pp. 676—715.

(40) Pope, R. G., *The Half-Way Covenant: Church Membership in Puritan England*, Princeton, 1969.

(41) Beales, R. W. Jr., "The Half-Way Covenant and Religious Scrupulosity: The First Church of Dorchester, Massachusetts, as a Test Case", *WMQ*, 3rd. ser., Vol. 31, No. 3, 1974, pp. 465—480.

(42) Johnson, E. A. J., "Economic Ideas of John Winthrop", *NEQ*, Vol. 3, 1930, pp. 235—250.

(43) Gray, S., "The Political Thought of John Winthrop," *NEQ*, Vol. 3, 1930, pp. 681—705.

(44) Dunn, R. S., *Puritans and Yankees: The Winthrop Dynasty of New England, 1630—1717*, Princeton U. P., 1962.

(45) Ziff, L., *The Career of John Cotton: Puritanism and the American Experience*. Princeton U. P., 1962.

(46) ————, ed., *John Cotton on the Church of New England*, Harvard U. P., 1968.

(47) Bush, S. Jr., *The Writings of Thomas Hooker: Spiritual Adventure in Two Worlds*, Winsconsin U. P., 1980.

(48) Thistlethwait, F., "Atlantic Partnership", *Economic Historical Review*（以下 *Eco. H. R.* と略す），2nd. ser., Vol. 7, No. 1, 1954, pp. 3—17.

(49) Sprunger, K. L., "William Ames and the Settlement of Massachusetts Bay", *NEQ*, Vol. 39, 1966, pp. 67—79.

(50) Trinterud, L. J., "Origins of Puritanism", *Church History*, Vol. 20, 1951, pp. 37—57.

(51) Knappen, M. M., *Tudor Puritanism: A Chapter in the History of Idealism*, Univ. of Chicago Press, 1939.

させた。すなわち彼は，Dedham において，タウン文書（The Early Records of the Town of Dedham）と教会の史料（manuscript records in the possession of the present Deacons of the First Church of Dedham）を用い，単なる教理レベルではなく，出生・死亡・結婚記録，課税台帳等を駆使している。このように，教会史研究が地域史研究と結びつきを強めるにつれ，各タウンの教会がいかに多様な面を持っていたかが明らかになってきている。例えば，Dedham の如く会衆的な教会に対し，Hingham ではプレスビテリアンの勢力を含んだアンバランスな性格が実証されている（Coolidge〔1961〕[53], Waters〔1971〕[54]）。

なおこの他に，最近の研究の中でかわった傾向のものとしては，Pope〔1969/70〕[55]，安息日問題を分析した Solbeng〔1977〕[56]，また，第五王国派の運動の一環としてニュー・イングランドのピューリタニズムをとらえた Maclear〔1975〕[57] があげられる。

次に，精神的遺産の継承という観点から移民に関する研究に言及したい。

## 〔2〕 移民史研究

イングランドからニュー・イングランドへの移民を追跡調査した研究は，前世紀末にすでに始まっている。アメリカでは早い時期から家系学が進歩し，移民をアルファベット順に記載したハンドブック類が何種類もあり，それらは今日でも引き続き追加・修正されている。Farmer〔1829〕[58], Savage〔1860/62〕[59], Pope〔1900〕[60], Banks〔1929〕[61]〔1930〕[62]〔1930〕[63]〔1930〕[64], Hotten〔1931〕[65] などがそれである。

われわれはこうした研究から，一移民の出身地・職業・家族・結婚・子供・移動の時期・死に至るまで知ることができる。こうした二次史料のおかげで，比較的容易に移民の社会・経済的および思想的背景を探ることができるのである。

そこで，移民とはいったい誰で，何故故国を去り新大陸へ向かったのかを探ることが，移民研究の出発点におかれる。タウンは，ある明確な理念のもとに建設

注 (52) Lockridge, K. A., "The History of a Puritan Church, 1636—1736", *NEQ*, Vol. 40, 1967, pp. 399—424.

(53) Coolidge, J., "Hingham Builds a Meetinghouse", *NEQ*, Vol. 34, 1961, pp. 435—461.

(54) Waters, J. J., "Hingham, Massachusetts, 1631—1661: An East Anglian Oligarchy in the New World", in Stanley N. Katz ed., *Colonial America: Essays in Politics and Social Development*, Boston, 1971.

(55) Pope, R. G., "New England Versus the New England Mind: The Myth of Declension", *Journal of Social History*, Vol. 3, 1969—1970, pp. 95—105.

(56) Solberg, W. U., *Redeem the Time: The Puritan Sabbath in Early America*, Harvard U. P., 1977.

(57) Maclear, J. F., "New England and the Fifth Monarchy: The Quest for the Millenium in Early American Puritanism", *WMQ*, 3rd. ser., Vol. 32, No. 2, 1975, pp. 223—260.

(58) Farmer, J., *A Genealogical Register of the First Settlers of New England*, 1829, repr. ed., Genealogical Publishing Company, Baltimore, 1964.

(59) Savage, J. ed., *A Genealogical Dictionary of the First Settlers of New England: showing three generations of those who came before May, 1692, on the basis of Farmer's Register*, 4 vols., 1860—1862, repr. ed., Genealogical Publishing Company, Baltimore, 1965.

(60) Pope, C. H., *The Pioneers of Massachusetts, 1620—1650*, 1900 repr. ed., Genealogical Publisning Company, Baltimore, 1965.

(61) Banks, C. E., *The English Ancestry and Homes of Pilgrims*, 1929, repr. ed., Genealogical Publishing Company, Baltimore, 1971.

(62) ——————, *The Topographical Sources of English Emigration to the New England Colonies, 1620—1650*, 1930, repr. ed., Genealogical Publishing Company, Baltimore, 1957.

(63) Banks, C. E., *The Planters of the Commonwealth: A Study of the Emigrants and Emigration in Colonial Times, 1620—1640*, 1930, repr. ed., Genealogical Publishing Company, Baltimore, 1975.

(64) ——————, *The Winthrop Fleet of 1630: An Account of the Vessels, the Voyage, the Passengers and thier English Homes from Original Authorities*, 1930, repr. ed., Genealogical Publishing Company, Baltimore, 1972.

(65) Hotten, J. C., *The Original Lists of Persons of Quality who went from England to the American Plantation*, N. Y., 1931.

された作為的な社会であるからこそ，その構成員を把握し，建設者の身許を調べることは，一世紀半のちの近代国家としての独立に至るまでの系譜をたどるうえでも重要なのである。

まず，移民を論じた包括的な研究としては Notestein〔1954〕[66]，Bridenbaugh〔1968〕[67] があるが，専門的な移民史の成果は，ロンドン大学に提出された Tyack の学位論文〔1951〕[68] があげられよう。彼は徹底して一次史料にあたった。移民の出身地の Parish record, Court recond 等を掘りおこし，地方史研究を活用した点で，移民史研究の上での彼の業績は画期的である。その後，英国で多くの地方史研究の成果が現われると，移民研究も当然州レベル，教区レベルと次第に詳細に個別化してゆくようになった。

その一例として，ウィルトシャーにおける移民研究 Salerno〔1979〕[69] をとりあげよう。この論文は，1630年代と1650年代の移民の時期的な格差に見られる背後の地域経済の動向に注目し，人口増加と都市一農村間の人口の流動が移民を押し出す要因であることを実証した。彼の功績は，移民の職業構成が時期的に変化すること，そしてこの変化が都市と農村の経済構造および人口増加の落差に起因する点に着目したことであろう。

ところで，移民研究史上論争をよんだのは Campbell〔1959〕[70] である。この研究は高名な思想的指導者や有力な富裕な商人以外の一般の人々を移民として発掘した点で，高い評価をもつ。Campbell の用いた史料は，17世紀後半のブリストルとロンドンからの出国記録である。1654～1685年ブリストルから出港した1万人中最初の7年間に出国した3,000人について，また1683～1684年ロンドンからの出国者約750人について身元を明らかにし，それに基づいてニュー・イングランドは，'middling classes' によって形成されたことを実証しようとした。

これに対し，Breen and Foster〔1973〕[28] は，より確実な史料（C. B. Jewson ed., Transcript of Three Registers of Passengers from great Yarmouth to Holland New England, 1637—39, 1954 Norfolk Record Society）からのみ得られた結果を発表した。この史料には，1637年 Yarmouth 港からの193人，Sandwich 港からの80人の移民の氏名・年齢・職業・新大陸の行先について記載がある。合計273人の移民の記録からわかることは，移民とは独身の若い労働力の価値の高い男性ばかりではなく，むしろその多くは，家族・兄弟，奉公人までをもつれて移住したという点である。さらに，Breen and Foster〔1973〕[28] では，Compbell の論文が「大移住」の査期の移民を直接扱っていないと批判した。

また，Galenson〔1978〕[71]〔1979〕[72] は，Campbell のたてた二つの仮定——第1に，'middling' を farmer, skilled artisan, tradesman と定義したこと，第2に，職業無記載の人々をすべて 'no trade' のグループに分けてしまったこと——を批判した。Galenson の批判論文に対し，Campbell〔1978〕[73]〔1979〕[74] において反批判をおこなっている。

以上のように，移民研究は，地方史の発展にともない新たな段階に達している。そこで，英国側とニュー・イングランド側との地方史を比較の観点から取り扱った新しいタイプのタウン研究が発表されるようになった。その先頭を切ったのが Powell〔1963〕[75] である。Powell の力作は，英国から来住した人々を追跡し，

注 (66) Notestein, W., *The English People on the Eve of Colonization, 1620—1630*, N. Y., 1954.

(67) Bridenbaugh, C., *Vexed and Troubled Englishman, 1590—1642*, N. Y., 1968.

(68) Tyack, Norman C. P., "Migration from East Anglia to New England before 1660",(unpublished, Ph. D. diss., Univ. of London, 1951).

(69) Salerno, A., "The Social Background of Seventeenth-century Emigration to America", *Journal of British Studies*, Vol. 19, No. 1, 1979, pp. 31—52.

(70) Campbell, M., "Social Origins of Some Early Americans", in James M. Smith ed., *Seventeenth-century America: Esaays in Colonial Hstory*, Chapel Hill, N. C., 1959.

(71) Galenson, David W., "Middling People' or 'Common Sort'?: The Social Origins of Some Early Americans Reexamines", *WMQ*, 3rd. ser., Vol. 35, No. 3, 1978, pp. 499—524.

(72) ————, "The Social Origins of Some Early Americans: Rejoinder", *WMQ*, 3rd. ser., Vol. 36, No. 2, 1979, . pp. 264—276.

(73) Campbell, M., "Midred Campbell's Response", *WMQ*, 3rd. ser., Vol. 35, No. 3, 1978, pp. 525—540.

(74) ————, "Midred Campbell repries", *WMQ*, 3rd. ser., Vol. 36, No. 2, 1979, pp. 277—286.

(75) Powell, S. C., *Puritan Village: The Formation of a New England Towns*, Wesleyan U. P., 1963.

ニュー・イングランドでどのような社会的役割を果たしたかを，実証的に検討したもので，英国側の教区とニュー・イングランドのタウンと双方の史料を駆使した比較研究である。具体的には，人々を manorial village (opeh-field) 出身者・bourough 出身者・East Anglian village (enclosed-farm) 出身者に分け，各々の影響のもとに Sudbury, Watertown, Malborough の農業経営，タウンシップのあり方を比較検討した。彼の創意は，英国とニューイングランドの地方史を結びつけ，詳細な点で両者の比較を可能にしたことにあるが，残念ながら，宗教・思想上の問題にはふれられていない。

Powell の研究を発展させた最近の成果は，Allen [1981][76] である。彼は Rowley, Newbury, Hingham, Ipswich, Watertown をとりあげ，英国の common law の新大陸での変容という新たな視点を加え，さらに詳しい比較研究をおこなった。

Powell から Allen への個別的な比較研究の進展について，Grevenはその書評論文 [1981][78] で，第1に，英国との連続性を強調するあまり，研究のすすんだタウン——Boston, Dedham, Concord, Salem, Sudbury 等——との比較の観点をもたない，第2に，英国との比較を強調するあまり，タウン自体の変遷のダイナミズムを説明しきれず，静態的な印象を与える，と批判している。

ところで，Allen が取りあげたコモン・ローの継受については，すでに法制史側からの研究がある。植民地史研究に法的問題の重要性を指摘したのは Haskins [1960][78] であるが，それ以外の研究を年代順にあげておくと，Goebel [1931][79], Haskins [1941][80] [1942][81] [1954][82] [1957][83], Howe and Eaton [1947][84], Haskins and Ewing [1958][85], Versteeg [1964][86], Billias [1965][87], Flaherty [1969][88] [1972][89], Friedman [1973][90], Warden [1978][91], Hoffer and Hull [1978][92], Konig [1979][93] などがある。

---

注 (76) Allen, D. G., *In English Ways: The Movement of Societies and the Transferal of English Local Law and Custom to Massachusetts Bay in the Seventeenth Century*, Chapel Hill, N. C., 1981

(77) Greven, P. J. Jr., "Reviews of Books", *WMQ*, 3rd. ser., Vol. 39, No. 2, 1981, pp. 365—370.

(78) Haskins, G. L., *Law and Authority in Early Massachustts: A Study in Tradition and Design*, Macmillan Company, 1960.

(79) Goebel, L. Jr., "King's Law and Custum in Seventeenth Century New England", *Columbia Law Review*, Vol. 31, No. 3, 1931, pp. 416—447.

(80) Haskins, G. L., "The Beginning of the Recording System in Massachusetts", *Boston Univ. Law Review*, Vol. 21, 1941.

(81) ————, "The Beginning of Partible Inheritance in the American Colonies", *Yale Law Journal*, Vol. 51, 1942, pp. 1280—1315.

(82) ————, "Condition of the Law in Colonial Massachusetts: A Study in Comparative Law", *Indiana Law Journal*, Vol. 30, 1954.

(83) ————, "Law and Colonial Society", *American Quarterly* (以下 *Am. Q.* と略す), Vol. 9, 1957, pp. 354—364.

(84) Howe, M. W. and Eaton, L. F. Jr., "The Supreme Judicial Power in the Colony of Massachusetts Bay", *NEQ*, Vol. 20, 1947, pp. 291—316.

(85) Haskins, G. L. and Ewing, S. E. "The Spread of Massachusetts Law in the Seventeenth Century", *Univ. of Pennsylvenia Law Review*, CVI, 1958.

(86) Versteeg, C. L., *The Formative Years, 1607—1763*, N. Y., 1964.

(87) Billias, George A. ed., *Laws and Authority in Colonial America*, Barre, Mass., 1965.

(88) Flaherty, David H. ed., *Essays in the History of Early American Law*, Chapel Hill, N. C., 1969.

(89) ————, *Privacy in Colonial New England*, Univ. Press of Virgina, 1972.

(90) Friedman, L. M., *A History of American Law*, N. Y., 1973.

(91) Warden, G. B., "Law Reform in England and New England, 1620—1660", *WMQ*, 3rd. ser., Vol. 35, No. 4, 1978, pp. 668—690.

(92) Hoffer, P. C. and Hill, N. E. H. "The First American Impeachments", *WMQ*, 3rd. ser., Vol. 35, No. 4, 1978, pp. 653—667.

(93) Konig, D. T., *Law and Society in Puritan Massachusetts: Essex County, 1629—1692*, Chapel Hill N.C., 1979.

以上のように，移民史研究は今日ますます個別化・多様化しつつある。

## 〔3〕 民主主義の検出

タウンの政治は民主政治(デモクラシー)であったか，それとも神政(テオクラシー)政治であったか，あるいは少数の貴族的身分(アリストクラシー)の者による寡頭政治(オリガーキー)であったか。このテーマは，タウンにアメリカ民主主義政治の伝統の原点を求めることができるか否かをめぐりしばしば争点となった。

19世紀から1950年代まで，Andrews, Parfrey, Osgood, Miller, Morison 等は，植民地政治をピューリタンの精神的指導者層による寡頭制支配と考えてきた。確かに，執政官 magistrates の中から選ばれた総督 Governor, 副総督 Deputy Governor には，Winthrop をはじめときる11名が常時名を連ねている。しかし，植民地議会 General Court の公職を一部の者が独占したという事実から，すべてのタウンが「寡頭的」といえるか，という疑問点から出発し，'Puritan Democracy' を唱えたのは，Brown の一連の研究である。この研究は，これまでのイメージを一新させるものであった。以下 Brown の業績をたどってみよう。

Brown〔1954〕(94) は，投票者の政治的参加の法的根拠を裏づけ，被選挙者に貧富の格差がみられないと主張した。このことから，ピューリタン・タウンでは，参政権と富とがほぼ平等に分配されているとし，決して 'aristocracy' でないことを論じた。さらに，Brown〔1963〕(95) において，Cambridge のタウン文書から，Brown〔1967〕(96) では Dedham の史料から，次のように述べている。すなわち，植民地議会のレベルでは確かに一部の有力者による役職の独占がみられる。しかし，個々のタウン内部においては納税者が平等に参政権を有し，タウンの役職は決して特定の者に限られていない。この事実から，タウンでは直接参加型民主主義が貫徹されたのである，と。

一方，Breen〔1970〕(97)〔1970〕(98)〔1975〕(99) は，植民地議会の中央集権的な権力のあり方 centralism に対抗して，個々のタウンでは地方分散型の権力のあり方 local autonomy（地域的自律性）が確立したことを主張した。この論文で Breen は，英国において絶対王制に対立した地方のジェントリーによる 'local particularism' が皮肉にもニュー・イングランドにおいて中央政府の権限に歯止めをかける運動となって現われたことを論じている。

さて，1960年以降，各タウンの民主主義を検出すべく，タウンの成員のどれほどの部分が参政権 franchise を有していたかを史料から実証しようとする試みが盛んにおこなわれるようになった。Brown〔1976〕(100) では，

注 (94) Brown, Katharine B., "Freemanship in Puritan Massachusetts", *American History Review*（以下 *Am. H. R.* と略す), Vol. 59, 1954, pp. 865—883.

この時期に 'franchise' 論争が盛んになった政治的背景には，冷戦がある。冷戦期，コミュニズムに対して民主主義の擁護に力を注いだアメリカの立場から，ニュー・イングランド研究においてもタウンの中に民主主義の原点を求める動きがでてきた。植民地時代に民主主義が実現されていたか否かは，のちの独立戦争の意義をめぐる論争と関係している。ここでは独立戦争の評価には立ち入らずに，タウンと民主主義を論じたの時期この代表的な研究をあげておくにとどめる。

Brown, Robert E., *Middleclass Democracy and the Revolution in Massachusetts, 1691—1780*, 1955; Grant, Charles S., *Democracy in the Connecticut Frontier Town of Kent*, 1961; Main, Jackson Turner, *The Social Structure of Revolutionary America*, 1965.

(95) Brown, Katharine B., "Puritan Democracy: A Case Study", *The Mississippi Valley Historical Review*, Vol. 50, No. 3, 1963, pp. 377—396.

(96) ————, "Puritan Democracy in Dedham, Massachusetts: Another Case Study", *WMQ*, 3 rd. ser., Vol. 24, No. 3, 1967, pp. 378—396.

(97) Breen, T. H., *The Character of the Good Ruler: Puritan Political Ideas in New England*, 1630—1730, N. H., 1970.

(98) ————, "Who Governs: The Town Franchise in Seventeenth-century Massachusetts", *WMQ*, 3 rd. ser., Vol. 27, No. 3, 1970, pp. 460—474.

(99) ————, "Persistent Localism: English Social Change and the Shaping of New England Institutions", *WMQ*, 3 rd. ser., Vol. 32, No. 3, 1975, pp. 3—28.

(100) Brown, Katharine B., "The Controversy over the Franchise in Puritan Massachusette, 1954 to 1974", *WMQ*, 3 rd. ser., Vol. 33, No. 2, 1976, pp. 212—241.

この一連の 'franchise' 論争を年代順にまとめたが，ここではそれを簡単に紹介しよう。

まず，コモン・ローの継受を論じた Haskins〔1960〕[78] は，新大陸の権利状態からして決して寡頭的支配はないと述べた。これに対して，Coolidge〔1961〕[53] は Hingham のケースをあげ，経済的な平等とはうらはらに patriarchal な支配が存在したと述べた。また，Ziff〔1962〕[45] は，1640年代半ば頃2万人中 1,708人しか 'citizenship' を有していないことから寡頭的支配があることを主張した。Rutman〔1962〕[101] は，絶対的な寡頭制でないとし，より多くの個別の事例研究が必要であると述べた。また，Simmons〔1962〕[102] は，Brown に批判を加えている。Powell〔1963〕[75]，Brown〔1963〕[95] はそろって Cambridge における民主主義の検出を試みた。

1964年以降，多くの若い歴史家が博士論文で，'franchise' 論争に正面からとりくんでいる。Greven〔1964〕[103] は，Andover における民主主義をとりあげた。Rutman〔1965〕[104] は，1630～1650年の Boston について，Winthrop ら一部のジェントリーが執政官としてタウンの政治・経済を牛耳ったと述べている。

Wall〔1965〕[105] は，各タウンの主な役職——deputy, selectman ——についた人々の財産額を調べ，タウンの平均的所得とを比較した。それによると，Boston では多くの富裕な商人・ジェントリーが役職を独占する傾向がみられるが，内陸部のタウン ——Roxbury, Dorchester——では，役職に選ばれた者と選ぶ者との所得の格差は，Boston 等商業中心のタウンよりも小さい。重要なことは，貧富とは無関係に，教会員でない者は役職についていないということである。この規制は商業的タウンでも同じである。さらに Wall〔1965〕[106] は，Cambridge について，Brown〔1963〕[95] の結論に対し，植民地政治は一部の 'puritan elite' によっておこなわれたとして反論を加えた。

また，Simmons〔1965〕[107] は，次のように結論づけた。1647年には成人男子のうち67％が参政権を有する freeman であったが，1686年には40％に減っている。参政権は教会の審査する資格であり，宗教的制限がある。従って植民地社会が民主主義といえるかどうかは疑わしい。むしろ問題なのは，freeman の数ではなく，その人々のもつ権力の質である，としている。Simmons の見解は，かつての 'Puritan Oligarchy' 説に似た印象を与えるものである。

さて，Foster〔1966〕[23] は，freeman の質に力点を置き，公平な選挙や経済的平等にもかかわらず，ピューリタン指導者層の強い信念とその理念に導かれた政治構造は必ずしも民主的とはいえないとしている。ところが，Lockridge〔1965〕[108]〔1966〕[109]〔1966〕[110] は，Dedham と Watertown をとりあげ，両タウンでは幅広く参政権が認められたとし，特に Dedham では90％の成人男子が参政権を有したことを例にあげ，タウンの民主的な側面を強調した。

Simmons, Wall, Foster, Lockridge は，すぐれた

注(101) Rutman, Darrett B., "God's Bridge Falling Down: 'Another Approach' to New England Puritanism Assayed", *WMQ*, 3rd. ser., Vol. 29, No. 3, 1962, pp. 408—421.

(102) Simmons, R. C., "Freemanship in Early Massachusetts: Some Suggestions and a Case Study", *WMQ*, 3rd. ser., Vol. 19, No. 3, 1962, pp. 422—428.

(103) Greven, P. J. Jr., "Four Generations: A Study of Family Structure, Inheritance, and Mobility in Andover, Massachusette 1630—1750" (unpublished, Ph. D. diss., Harvard Univ., 1964) revised ed., *Four Generations: Population, Land, and Family in Colonial Andover, Massachusetts*, N. Y., 1970.

(104) Rutman, D. B., *Winthrop's Boston: Portrait of a Puritan Town, 1630—1649*, Chapel Hill, N. C., 1965.

(105) Wall, Robert E. Jr., "The Membership of the Massachusetts General Court, 1634—1686", (unpublished, Ph. D. diss., Yale Univ., 1965).

(106) ——————, "A New Look at Cambridge", *JAH*, Vol. 52, No. 3 1965, pp. 599—605.

(107) Simmons, R. C., "Studies in the Massachusetts Franchise 1631—1691", (unpublished, Ph. D. diss., Univ. of California at Berkeley, 1965).

(108) Locridge, K. A., "Dedham, 1636—1736: The Anatomy of a Puritan Utopia", (unpublished, Ph. D. diss. Princeton Univ., 1965).

(109) Lockridge and Kreider. A., "The Evolution of Massachusetts Town Government, 1640—1740", *WMQ*, 3rd. ser., Vol. 23, No. 4, 1966, pp. 549—574.

(110) Lockridge, K. A., "The Population of Dedham, Massachusetts, 1636—1736", *Eco. H. R.*, 2nd. ser. Vol. 19, No. 2, 1966, pp. 318—344.

博士論文を発表した後もこの論争にひきつづき参加している。Simmons〔1968〕[111]〔1968〕[112]では，宗教による政治へのコントロールを強調している。この点は，教会員 Church membership に関する Pope〔1969〕[40]へ影響を与えた。また，Thorpe〔1970〕[113]は，大多数の成人男子は植民地時代を通じて参政権を有していたと述べている。freeman の人口比率については，Wall〔1970〕[114]〔1972〕[115]が各タウンごとに統計的にまとめている。これにひきつづき，Lews and Webb〔1973〕[116]の統計的分析がある。

以上のように 'franchise' 論争は，freeman の数量的分析と質的見直しが各タウンごとになされ，統計的手法や教会史との関連で，より洗練された議論に改められている。Brown〔1976〕[100]の指摘―― 参政権を承認する法と実際の投票の間にはギャップがあったのではないかという疑問――に対しては，Ginsburg〔1977〕[117]が Ipswich のケースをあげ，Wall〔1977〕[118]が Dedham・Cambridge のケースをあげ，各々批判論文を発表している。

ところで，この一連の論争について，「民主主義の検出」の方法に関し，タウン別の細かい実証には2つの見落しがあると考えられる。すなわち，第1に，植民地議会の指導者・有力な商人・タウン設立時の功労者等は，各タウンにまたがる大量の土地を所有していたこと，第2に，各タウン間の人口移動が激しく，人々は複数のタウンで役職につく可能性があったこと，である。一タウン内での土地分割が平等におこなわれても，複数のタウンをあわせると数千エーカーにものぼる大土地を所有する少数者が存在した。また，あるタウンの有力者が新設のタウンへ移住し，そこで再び役職につくことがある。しかも移動は生涯数度におよぶことも多いので，特定の人物が複数のタウンで役職についた例もある。この2点から，タウン別の実証研究には限度があり，複数のタウンを含むある一定の地域にまで研究領域を広げる必要がある。また選挙権と政治の機能とは一致するとはいえないであろうし，さらにまた変革期ないし一社会の草創期における政治的リーダーシップと共和主義的平等観の間のずれの問題があるし，他の植民地（中・南部）との比較において，スペイン・ポルトガル・オランダ・フランス系植民地との比較において「寡頭制」の程度および質の差違を考えなければならないであろう。

## 〔4〕まとめ――ミクロの世界とマクロの世界――

### (A) 'Community Studies'――ミクロの世界の発掘

以上見てきたとおり，ピューリタン植民地史の研究は，どの論点をとっても，地方史研究の進展にともないタウンレベルにまで下りてきたといえる。今後も各タウンの各年代別・ジャンル別の細かい研究が進み，さらに新しい多様な事実が掘りおこされるだろう。だが，こうしたいわばミクロの世界の発掘は，それ自体どのような意味があるのか，また，植民地史全体の歴史像にどのようなインパクトを与えるのだろうか。

最近では，研究対象が地域的・時代的に特定されるのと平行して，そうした限定された対象に必要な限りのさまざまな方法が導入されるようになっている。Beeman〔1977〕[119]の指摘にもあるように，「人口・家族

注(111) Simmons, R. C., "Godliness, Property and the Franchise in Puritan Massachusetts: An Interpretaion", *JAH*, Vol. 55, 1968, pp. 495—511.

(112) ――――, "The Massachusetts Revolution of 1689: Three Early American Political Broadsies", *Journal of American Studies*, Vol. 2, 1968, pp. 1—12.

(113) Thorpe, James, A., "Colonial Suffrage in Massachusetts: An Essay Review", *Essex Institute, Historical Collections*, CVI, 1970, pp. 169—181.

(114) Wall, R. E. Jr., "The Massachusetts Bay Colony Franchise in 1647", *WMQ*, 3 rd. ser., Vol. 27, 1970, pp. 136—144.

(115) ――――, "Decline of Massachusetts Franchise", *JAH*, Vol. 59, No. 2, 1972, pp. 303—310.

(116) Lews, T. B. and Webb, L. M., "Voting for the Massachusetts Council of Assistans, 1674—1686: A Statical Note", *WMQ*, 3 rd. ser., Vol. 30, No. 4, 1973, pp. 625—634.

(117) Ginsburg, Arlin I., "The Franchise in Seventeenth-century Massachusetts: Ipswich", *WMQ*, 3 rd. ser., Vol. 34, No. 3, 1977, pp. 446—452.

(118) Wall, R. E. Jr., "The Franchise in Seventeenth-century Massachusetts: Dedham and Cambridge", *WMQ*, 3 rd. ser., Vol. 34, No. 3, 1977, pp. 453—458.

(119) Beeman, Richard R., "The New Social History and the Search for 'Community' in Colonial Amer-

・経済的および地理的な移動，社会構造一般に関する cross-cultural studies」という性格の 'Community Studies' が盛んになっている。この種の研究は，未刊行の manuscript を駆使するほかに，will, inventory, deed books, tax lists, church records を用い，家族や社会の総合的な再現を試みる。

以下に，各タウンごとにどのような研究があるかを挙げておこう。

<Massachusetts>

*Boston:* Rutman [1963][104], Henretta [1965][120]

*Andover:* Greven [1970][103]

*Dedham:* Lockridge [1970][121]

*Dorchester:* Beales [1974][41]

*Hingham:* Coolidge [1961][53], Waters [1971][54], Smith [1973][122]

<Connecticut>

*Guilford:* Waters [1982][123]

*Springfield:* Innes [1977][124] [1978][125]

*Milford:* Moran [1979][126]

<Plymouth>

*Barnstable:* Waters [1976][127]

Plymouth 一般: Demos [1970][128]

このうち，'patriarchal' な性格をもつ Barnstable, 設立当初から2つのグループの移民間の緊張を孕んだ Hingham，辺境タウン Springfield 等，これまでみられなかったタウンの性質が明らかにされている。

**（B） 新しい視点**

タウンにおける研究が質・量ともに増加するにつれ，より通時的で地域的広がりをもったパースペクティブで植民地史をとらえ直そうとする動きも活発である。それは，地方史研究の外側からの刺激による。まず，1950年代人類学におけるアフリカン・スタディズの成果，経済成長論とタイアップした数量経済史，フランス歴史人口学の研究成果，ウォーラステイン流の世界システム論，社会史等々多くの潮流がニュー・イングランド研究の方法に影響を与えてきた。以下詳しく立ち入ってみよう。

① 経済成長論と世界経済論

1960年以降，経済成長への関心が高まり，経済史研究においても，国民所得や投資の計量分析が行なわれ，経済理論へ接近する傾向が見られた。この傾向は，植民地史研究においては，アメリカ独立革命が真に英国の経済的従属下からの脱出であったのか否かを実証しようとする動きと相まっている。さらに，ウォーラステインの世界的規模での資本蓄積論の理論的援助もあって，英国と植民地との間の資本形成と経済発展とを再検討する研究が現われた。代表的なものは Davis [1973][129] であるが，その後の研究として Anderson [1975][130], McCusker [1978][131] がある。また，最近では，

ica", *American Quarterly*, Vol. 29, No. 4, 1977, pp. 422—443.

注(120) Henretta, James, A., "Economic Development and Social Structure in Colonial Boston", *WMQ*, 3rd. ser., Vol. 22, No. 1, 1965, pp. 76—92.

(121) Locridge, K. A., *A New England Town: The First Hundred Years Dedham, Massachusetts, 1630—1736*, N. Y., 1970.

(122) Smith, Daniel Scott, "Parental Pattern and Marriage Patterns: An Analysis of Historical Trends in Hingham, Massachusetts", *Journal of Marriage and the Family*, Vol. 35, 1973, pp. 419—428.

(123) Waters, John J. Jr., "Family, Inheritance, and Migration in Colonial New England: The Evidence from Guilford, Connecticut", *WMQ*, 3rd. ser., Vol. 39, No. 1, 1982, pp. 64—86.

(124) Innes, Stephen, "A Patriarchal Society: Economic Dependency and Social Order in Springfield, Massachusetts, 1636—1702", (unpublished, Ph. D. diss., Northwestern Univ., 1977).

(125) ————, "Land Tenarcy and Social Order in Springfield, Massachusetts, 1652 to 1702", *WMQ*, 3rd. ser., Vol. 35, No. 1, 1978, pp. 33—56.

(126) Moran, G. F., "Religious Renewal, Puritau Tribalism, and the Family in Seventeenth-century Milford, Connecticut", *WMQ* 3rd. ser., Vol. 36, No. 2, 1979, pp. 236—254.

(127) Waters, John J. Jr., "The Traditional World of the New England Peasants: A View from Seventeenth-century Barnstable", *New England Historical and Genealogical Register*, CXXIX, 1976, pp. 3—21.

(128) Demos, J. P., *Little Commonwealth: Family Life in Plymouth Colony*, N. Y., 1970.

(129) Davis, Ralph, *The Rise of the Atlantic Economies*, N. Y., 1973.

(130) Anderson, T. L., *The Economic Growth of Seventeenth Century New England: A Measurement of Regional Income*, Arno, 1975.

タバコ生産の中心地 Chesapeak 地域に関して，統計・経済理論に則した研究がある。Tate and Ammerman〔1979〕[132], Menard, Carr, and Walsh〔1983〕[133] 等がそれである。

② 人口統計学と歴史人口学

先に述べたように，植民地には家系学の史料が豊富である。そこで，人類学の影響（「家族」の発見）と，植民地史における統計的手法の発達は，人口史研究へと結びつきを深める方向へ向かった。歴史人口学については，主として英国ケンブリッジ・グループによる研究——Wrigley〔1966〕[134], Grass and Eversley〔1965〕[135], Laslett〔1965〕[136]——と Louis Henry による家族復原法の影響が大きい。この場合，移民史研究が主に英国側の 'provincial history' の成果[137]に目を向け，その実証された事実に注目したのに対し，むしろ対象を取扱う方法そのものを吸収しようとする傾向が大きい。ともかく，ニュー・イングランドにおいては，こうした方法がタウンレベルで取り入れられ，地方史研究の発達を促す結果となった。例えば，Dedham に関する Lockridge〔1966〕[110] は，Greven〔1967〕[138] によれば，Eversley による集計的分析法を応用した研究であるといえよう。人口統計学に関するまとまった研究としては，Cassedy〔1970〕[139]，特に18世紀については Higgs and Steller〔1970〕[140], Molen〔1971〕[141]，また経済成長と人口の関係を論じた Smith〔1972〕[142] がある。

③ 家族史・社会史

ピューリタン植民地における家族史研究は，人口統計学と家族復原法の導入によって，ますます盛んになっている。そして，1970年代後半には，家族構成や世帯規模を数量的に分析する歴史人口学から，家族内のより緊密な生活を描きだそうとする傾向にある。その先駆的業績として，Morgan〔1944〕[20] は位置づけられよう。ここ数年は Morgan のピューリタン家族の研究を，社会史（'mentalité）の研究者らが，新たな形で生き返らせたように思われる。Henretta〔1978〕[143] は，前産業化段階における家族構成と地域社会の 'mentalité' を統合的に扱った重要な論文である。

'mentalité' とは，これまで社会意識の分析に用いられた 'ethos' と異なり，より親密な間柄の人々の間に漂う感情のような漠然としたものである。この 'mentalité' を検出する方法としては，第1に，誕生・結婚・死という人間の life cycle の段階を年齢別にデータにまとめ，世代ごと時代ごとの変遷を考察するしかたと，第2に，当時書かれた物語・日記や伝承から

注(131) MuCcsker, John J., *Money and Exchange in Europe and America, 1600—1775: A Handbook*, Chapel Hill, N. C., 1978.

(132) Tate, T. W. and Ammerman, D. L., eds., *The Chesapeake in the Seventeenth Century: Essays on Anglo-America Society*, Chapel Hill, N. C., 1979.

(133) Menard, R. R., Carr, L. G., and Walsh, L. S., "A Small Planter's Profits" The Cole Estate and the Growth of the Early Chesapeake Economy", *WMQ*, 3rd. ser., Vol. 40, No. 2, 1983, pp. 171—196.

(134) Wrigley, E. A. ed., *An Introduction to English Historical Demography from the Sixteenth to the Nineteenth Century*, London, 1966.

(135) Glass, D. V. and Evesley, D. E. C. eds., *Population in History: Essays in Historical Demography*, London, 1965.

(136) Laslett, P., *The World we have lost*, N. Y., 1965.

(137) Joan Thirstk, Alan Everitt, C. W. Chalklin, W. G. Hoskins 等の論文。

(138) Greven, P. J. Jr., "Historical Demography and Colonial America", *WMQ*, 3rd. ser., Vol. 24, No. 3, 1967, pp. 438—454.

(139) Cassedy, James, H., *Demography in Early America: Beginning of Statistical Mind, 1600—1800*, Harvard U. P., 1969.

(140) Higgs, R. and Stettler, H. L. III, "Colonial New England Demography: A Sampling Approach", *WMQ*, 3rd. ser., Vol. 27, No. 2, 1970, pp. 282—294.

(141) Molen, P. A., "Population and Social Patterns in [Barbados [in [Early Eighteenth Century", *WMQ*, 3rd. ser., Vol. 28, No. 2, 1971, pp. 287—300.

(142) Smith, D. S., "The Demographic History] of Colonial New England", *Journal of Economic History*, Vol. 32, 1972, pp. 165—183.

(143) Henretta, J. A., "Families and Farms: Mentalité in Pre-Industrial America", *WMQ*, 3rd. ser., Vol. 35, No. 1, 1978, pp. 3—32.

人々の社交関係を探り，その中から心理的な動きや感情を読みとろうとするしかたとが考えられる。第1の方法を用いたのは，Greven〔1966〕[144]，また世代ごとに変化を追った研究には，Greven〔1970〕[103]，Dunn〔1962〕[44]，Middlekauff〔1972〕[145]，Bissell〔1974〕[146]がある。

第2の方法は，フランスの歴史家 P. Ariès やアナール学派の影響を強く受けている。子供・教育・結婚・死・女性――どれもかつて単独ではとりあげられることのなかったテーマについて，最近では多くの論文が発表されている。教育を社会の再生産のための重要な要因としてとりあげた Bailyn〔1960〕[147]，Greven〔1977〕[148]，結婚についての Smith〔1973〕[122]，死についての Stannard〔1974〕[149]〔1977〕[150]，Geddes〔1981〕[151]，そして女性についての Ulrich〔1976〕[152]，Koehler〔1980〕[153]，食生活を描いた Levenstein〔1980〕[154]がある。

最後に，ピューリタンの信仰生活から排除され，その裏側に存在した魔女とインディアンについてふれておく。ニュー・イングランドでは，セーラムの魔女が有名な事件である。古典的な研究 Kittredge〔1929〕[155]以降は，社会史等の影響を受けた次のような論文がある。Drake〔1968〕[156]，Hansen〔1969〕[157]，Demos〔1970〕[158]，Werking〔1972〕[159]，Boyer and Nissenbaum〔1972〕[160]〔1974〕[161]，Holdsworth〔1975〕[162]，Gildrie〔1977〕[163]，Demos〔1982〕[164]。また，インディアンについては，Salisbury

注(144) Greven, P, J. Jr., "Family Structure in Seventeenth-century Andover, Massachusetts", *WMQ*, Vol. 33, No. 2, 1966, pp. 234—256.

(145) Middlekauff, R., *The Mathers: Three Generations of Puritan Intellectuals*, 1596—1728, N. Y., 1971.

(146) Bissell, L. A. "From One Generation to Another: Mobility in Seventeenth-century Windsor, Connecticut", *WMQ*, 3 rd. ser., Vol. 31, No. 1, 1974, pp. 79—110.

(147) Bailyn, B., *Education in the Forming of American Society: Need and Opportunities for Study*, Chapel Hill, N. C., 1960.

(148) Greven, P. J. Jr., *The Protestant Temperament: Patterns of Child-Rearing, Religious Experience, and the Self in Early America*, N. Y., 1977.

(149) Stannard, D. E., "Death and the Puritan Child", *Am. Q.*, Vol. 26, No. 5, pp. 456—476.

(150) ――――, *The Puritan Way of Death: A Study in Religion, Culture, and Social Cnange*, N. Y., 1977.

(151) Geddes, G. E., *Welcome Joy: Death in Puritan New England*, Mich., 1981.

(152) Ulrich, L. T., "Vertuous Women Found: New England Ministerial Literature, 1668—1735", *Am. Q.*, Vol. 28, No. 1, 1976, pp. 20—40.

(153) Koehler, L., *A Search for Power: The 'Weaker Sex' in Seventeenth-century New England*, Univ. of Illinois Press, 1980.

(154) Leverstein, H., "The New England Kitchen and the Origins of Modern American Eating Habits", *Am. Q.*, Vol. 32, No. 4, 1980, pp. 369—386.

(155) Kittredge, G. L., *Witchcraft in Old and New England*, 1929, rept. N. Y., 1972.

(156) Drake, F. C., "Withcraft in the American Colonies, 1642—62", *Am. Q.*, Vol. 20, No. 4, 1968, pp. 694—725.

(157) Hansen, C., *Witchcraft at Salem*, N. Y., 1969.

(158) Demos, J., "Uuderlying Themes in the Witchraft of Seventeenth-century New England", *Am. H. R.*, Vol. 75, No. 5, 1970, pp. 1311—1326.

(159) Werking, R. H., "Reformation Is Our Only Preservation: Cotton Mother and Salem Witchcraft", *WMQ*, 3 rd. ser., Vol. 29, No. 2, 1972, pp. 281—290.

(160) Boyer, P. and Nissenbaum, S., *Salem-Village Witchcraft: A Documentary Record of Local Conflict in Colonial New England*, Baltimore, 1972.

(161) ――――, *Salem Possessed: The Social Origins of witchcraft*, Harvard U. P., 1974.

(162) Holdsworth, W. K., "Adultery or Witchcraft? A Note on an Old Case in Connecticut", *NEQ*, Vol. 48, 1975, pp. 394—409.

(163) Gidrie, Richard, P., *Salem, Massachusetts, 1626—1683: A Covenant Community*, Univ. Press of Virginia, 1975.

(164) Demos, J., *Entertaining Satan: Witchcraft and the Culture of Early New England*, N. Y., 1982.

(165) Salisbury, N., "Red Puritans: The 'Praying Indians' of Massachusetts Bay and John Eliot", *WMQ*,

〔1974〕[165], Nash〔1974〕[166], Cook〔1976〕[167], がある。

## 結　び

ここに述べた新しい方法に対しては，すでに Henretta〔1971〕[168] のごとく鋭い批判も数多く出ており，方法論自体への再検討をふまえて植民地史研究は新たな段階へはいっているといえそうだ (Moran and Vinovskis〔1982〕[169], Smith, D. S.〔1982〕[170], Smith, D.B.〔1982〕[171])。個人→家族→地域社会（コミュニティー）という同質的な広がりのあるピューリタン社会を，かつて Morgan は 'Puritan Tribalism' と称したが，今日ではこうしてひとたびミクロの世界にまでおりた研究を，家族や地域を超えた政治・経済・宗教・思想の全体の脈絡の中にどのように統合的に位置づけるかが重要な問題となっている。

1960年以降，各タウンでの実証研究の急激な増加と，歴史学を社会科学の中に新たに位置づけようとする数々の野心的な実験とは，軌を一にしている。そして，それは研究者どうしの徹底した討論と緊密な協力によって可能となったものであることは明らかである。

しかし，こうした研究状況は大きな問題を孕んでいると思われる。ミクロの世界の発掘は，研究対象に対する意味喪失へとつながらないだろうか。マクロの世界を求めるあまり，史実が方法の奴隷におとしめられないだろうか。

'Community Studies' の進展は，前世紀の郷土史のごとく，「現在と過去との対話」なき単なる「過去の再現」に終わってしまう危険性が大きい。また，数々の新しい視点からなされた多くの研究は，再統合する理論のない状態では，ケース・スタディのレベルにとどまり，そのかぎりでは一つの焦点へ歴史像を結ぶことが困難となる。研究者に関しても，かつての Waltzer〔1965〕[172] のごとく鋭い問題意識に支えられ，現代社会の見直しをせまるようなラディカールな態度が失われ，かえって保守化しているようにみえるのである。

アメリカの経済史学界においては，土地制度史研究の伝統は元来深いものとはいえず，イギリスにおける R. H. Tawney や Leicester 学派のような研究が学界に定着することがすくないままに，政治的急進主義と冷戦以来の保守主義，および技術的分析手法におし流されて行く傾向は否定できない。以上の点に留意し，今後の学界動向を見守るべきであろう。

（慶應義塾大学大学院経済学研究科博士課程）

3 rd. ser., Vol. 31, No. 1, 1974, pp. 27—54.

注(166) Nash, G. B., *Red, White, and Black: The Peoples of Early America*, N. J., 1974.

(167) Cook, S. F., *The Indian Population of New England and in the Seventeenth Century*, Univ of California Press, 1976.

(168) Henretta, J. A., "The Morphology of New England Society in the Colonial Period", *Journal of Interdisciplinary History*, Vol. 2, No. 2, 1971, pp. 381—398.

(169) Moran, G. F. and Vinovskis, M. A., "The Puritan Family and Religion: A Critical Research", *WMQ*, 3 rd. ser., Vol. 39, No. 1, 1982, pp. 29—63.

(170) Smith, D. S., "A Perspective on Demographic Methods and Effects in Social History", *WMQ*, 3 rd. ser., Vol. 39, No. 3, 1982, pp. 442—468.

(171) Smith, D. B., "The Study of the Family in Early America: Trends, Problems, and Prospects", *WMQ*, 3 rd. ser., Vol. 39, No. 1, 1982, pp. 3—28.

(172) Waltzer, M., *The Revolution of the Saints: A Study in the Origins of Radical Politics*, Harvard U. P., 1965.